

# ラオス人日本語学習者の「説明文」「意見文」の分析

## ——難易度推定と表現形式の観点から——

マティナー・プマリノー (ラオス国立大学ラオス日本人開発センター)

### 要 旨

本稿はリーダビリティやリーディングチュウ太を利用し、日本人大学生と学習者の作文を比較し、文章の読みやすさを測ったうえ、作文の難易度推定、単語レベルチェックを分析した。さらに、文章に見られた「文末表現」、「のだ」、「接続」も視野に入れ、調査を行った。その結果、日本人大学生の場合には「説明文」や「意見文」にリーダビリティに差がなかったが、ラオス人学習者は「説明文」の方がリーダビリティが高く、日本語学習歴の長い人のほうがより理解しやすい作文が書けていた。また、ラオス人学習者のほうが文末表現のバリエーションが多かった。接続形式については、ラオス人学習者の「説明文」に最も多く見られたのはテ形であった。ラオス人学習者の作文にはあまり「のだ」文が用いられていなかったが、日本での滞在経験がある人には多少の使用が見られたことは、学習環境の影響があるということを指摘し、作文教育の課題として位置づけた。

キーワード：作文教育、難易度推定、リーダビリティ、リーディングチュウ太、表現形式

### 1.はじめに

ラオスでの日本語教育はまだ新しい分野であり、特に作文教育も大きな課題の1つである。ラオス人日本語学習者の書いた作文が理解しにくい、読み手に伝わりにくいという現象があるようである。そのため、学習者にどのように作文教育を導入すればよいのかを少しでも解明するために、本論ではラオス人日本語学習者の作文の難易度および作文に使用された文末表現に焦点を当てて、分析を行った。

本研究では、ラオス人日本語学習者における問題点を探るため、ラオス人日本語学習者および日本語母語話者に「説明文」と主観性を表す「意見文」を書くよう依頼した。そこで本論では次の3つの課題を設定する。

課題1：ラオス人日本語学習者と日本語母語話者における「説明文」および「意見文」の類似点と相違点を明らかにする。

課題2：ラオス人日本語学習者の文末表現の習得状況を全般的に観察し、特に「のだ」文についてどのような特徴、用法で捉えているのか明らかにする。

課題3：ラオス人日本語学習者の「のだ」の誤りはラオス人日本語学習者に限った問題ではなく、日本語学習者一般の問題であることを明らかにする。

### 2.本研究の用語の説明・定義

本研究に扱う次の用語は主に先行研究、日本語教育辞典等に述べられている定義を用いる。また、本研究にも同様な定義で扱うことにする。詳しくは2章で述べるが、用語の説明・定義を行う。

## 2.1. 難易度推定について

本研究で扱う「難易度推定」というのはラオス人日本語学習者および日本語母語話者が作成した作文の難易度を測ること、作文に使用された単語レベルを測ることである。本調査ではリーダビリティとリーディングチュウ太という2つのツールで作文レベルを測定する。

### 2.1.1. リーダビリティ

リーダビリティ(readability)とは、文章の読みやすさを測るツールである。リーダビリティ研究は、古くは1890年代からあると言われているが、本格的な研究は米国で1940年代に盛んになった。李・長谷部・柴崎(2009)を引用すると、リーダビリティ(readability)とは文章の読み易さのことを指すが、米国を中心とする欧米諸国では1920年代に研究が始められ、外国人英語学習者のための英文リーダビリティのような様々な公式が提案されてきた。日本語に関するリーダビリティ研究としては、坂本(1971)を始めとして、「読書科学」の分野で注目すべき研究があった。近年、こうした試みは、図書選択における有用な指標として実用化されつつあり、様々な分野で期待されている。教育分野のみならず、商業分野でも注目されている。例えば、Amazon.com などでは、利用者へのサービスとしてFlesch-Kincaid Indexで難易度を表示している。また、韓国などでもKyobobooksを中心とする大手書店で同様の試みがなされていると指摘した。

### 2.1.2. リーディングチュウ太

川村(2012)によると、日本語読解学習支援システム「リーディングチュウ太」は、1999年に公開され、現在まで1日平均1,500件以上の利用があるとされる。「リーディングチュウ太」には読解学習支援のためのツールとして次のようなものが用意されている。

- ① 辞書ツール(日英・日独・日蘭・日斯・日西)
- ② レベル判定ツール(語彙チェッカー・漢字チェッカー)
- ③ 文型辞典ツール
- ④ 読解教材バック
- ⑤ リング集
- ⑥ 文法クイズ

以上がリーディングチュウ太の役割である。これらを組み合わせて使うことによって、日本語教育にも自律学習支援にも役に立てることができると述べた。つまり、日本語教師にとってもこのリーディングチュウ太を使うことによって、読み物を選択するときのどの程度の難しさで学習者のレベルにあたる教材が作れる。に教えるのかは非常に役に立つツールである。また、学習者にとっても自分の単語レベルや漢字レベルが確認できる上で、授業以外にどこでもいつでも自律学習者ができる。

## 2.2. 表現形式

### 2.2.1. 文末表現

文末表現とは、文の終止を、表現上どのような文法形態、表現形式で終止するかを問題にすることを言う。つまり、日本語では文末をいかなる品詞で終止させるかが、資料の性

格、文体の在り方、時代性などを知る点で重要とある。

日本語の語順は SOV という形であり、各文の一番最後にある V が重要だと認識してきた。つまり、主語がなくてもよいという言語である。しかし、作文の場合は日常会話との異なるため、表現形式である文末表現を学ぶのが重要であろう。作文には自分の感情等を直接に表せないからこそ、これらの文末表現を本格的に学ぶことが必要であると考えられる。特に、日本語には非常に文末表現のバリエーションが多い言語であると言われるため、他の筆者の文章を引用するときどのように記せばよいのか、または筆者自身の気持ちを読み手に順調に伝わるため、どのような文末表現形式を使用するのかを外国人日本語学習者に意識されるのが第一歩の作文の授業であろう。

### 2.2.2. 現在に至る研究に見られた「のだ」について

小川(1982)は、「のだ」は一般に文の形式をとっている表現を、準体助詞「の」を後続させて体言化し、それを肯定的な断定判断を表す「だ」によって承けている。つまり、文の形式をとってあらわすことができる事柄を「AはBだ」の形式に置き換えることによって、改めて疑いのない事実だと確認する意を表すものであり、客観的事実を描写するものではない。従って、個々の文脈においては聞き手に対して、ある事柄が事実であることを強調したり自己の判断を出張したりして納得させようとする含みを帯び、いわゆる説明型・説得型の表現に多く用いられると指摘した。

そして、小川(1982)による、話し言葉では「んだ／んです」の形をとることも多い。また、書き言葉では「のである」の形でも用いられ、次のように述べた。

- ① ある結論を導き出すために、その前提となる事柄を述べるのに用いる。また、単に話題を展開するための前提として、聞き手にある事実を知らせるのに用いる。
- ② ある事柄を前提として、それから必然的に導き出される結論を出張するのに用いる。

ムードの「のだ」:

ムードの「のだ」文は二種類に分けられる。前者は先行する文や状況について説明するとき、あるいは説明を求めるときに用いる形式である。後者は「命令」「決意」等の機能を果たしている。つまり、ムードの「のだ」は、「のだ」がなくても一文としては成立しうる文に加えられて、「説明」等と言われるような、話し手の心的態度いわゆるムードを表している。

スコープの「のだ」:

スコープの「のだ」は文のどの部分が否定されるのか、といった問題を考えるに当たって、否定、疑問等の作文がおよびうる範囲をスコープ、その作文を集中的に受ける部分がフォーカスである。

久野(1991)、池上(1998)他では、作用領域と訳される。数量表現、否定、疑問、副助詞の表現等。ある範囲に対する意味作用のこと。作用範囲で特に重点が置かれて取り上げられたものは焦点(Focus)という。

### 2.2.3. 接続

接続とは、構文論上の機能を重視した文法論の述語。切り離して表現することのできる2つ以上の語・句・節・文・段落を相互の意味の関係からつなぎ合わせることをいう。つまり、主語―述語、修飾―被修飾といった関係を除いた連続関係が「接続」である。

### 3.対象と調査方法

#### 3.1.対象

- ① 文章の読みやすさ：リーダビリティ：リーダビリティ(readability)<sup>(1)</sup>とは、文章の読みやすさを測るツールである。
- ② 単語レベル判定：リーディングチュウ太：「リーディングチュウ太」(reading tutor)<sup>(2)</sup>は読解学習支援のためのツールとして辞書ツール、レベル判定ツール等のようなものが用意されている。
- ③ 文末表現：国立国語研究所による外国人日本語学習者の作文コーパスデータ、日本語教師経験のある日本語母語話者による判定。

#### 3.2.分析データ

本研究では扱ったデータは、ラオス国立大学の日本語学科およびラオス日本センターの中上級のラオス人日本語学習者、計18名と、筑波大学生日本語母語話者、計14名に「説明文」「意見文」を書いてもらった。さらに、国立国語研究所による外国人日本語学習者の作文コーパスを資料として分析を行った。

#### 3.3.分析手法

課題1を明らかにするために、まず、川村(1999)によるリーディングチュウ太を用い、5段階のレベルで調査対象者の単語レベルを測定した。また、各作文の読みやすさを把握するために柴崎・沢井(2007)、李・長谷部・柴崎(2009)のリーダビリティ測定を使用し、観察した。さらに、ラオス人日本語学習者と日本語母語話者が用いた表現形式いわゆる「文末表現」「接続」も分析を行った。

課題2と課題3としては、ラオス人日本語学習者の作文に見られた「のだ」文以外に、国立国語研究所による外国人学習者の作文コーパスに見られた「のだ」文も資料として扱い、野田(1997)、市川(1997)、山崎(2006)の分類に従い、「脱落」「付加」「混同」「その他」という誤用分類を基準として、分析を行った。

### 4.結果と考察

#### 4.1.課題1：ラオス人学習者と母語話者における各作文の類似点と相違点

〈難易度推定〉

類似点：

- I. 文の読みやすさ：両者は「意見文」より「説明文」のほうがリーダビリティが高い傾向がある。言い換えると、平均すると「意見文」のリーダビリティ(読みやすさ)が「説明文」より低いことがわかった。
- II. 単語レベル：ラオス人学習者と母語話者が「説明文」に使用されている単語レベルはそれほど難易度の高い言葉ではなく、平均すると「やさしい」という段階の単語を用いて「説明文」を作成した。

相違点：

- I. 文の読みやすさ：日本語母語話者に比べると、ラオス人学習者における「説明文」「意見文」よりいずれも、各作文のリーダビリティの有意差が大きい。特に「意見文」である。つまり、ラオス人学習者の作文は「意見文」よりおそらく読み手にとってわかりやすいと言えるだろう。
- II. 単語レベル：日本語母語話者が「意見文」に使用した単語レベルがラオス人日本語学習者より1段階異なり、平均すると「ふつう」である。結果から見ると、「意見文」はラオス人学習者にとって難しい課題テーマであろう。

<表1> ラオス人日本語学習者における作文の読みやすさと単語の難易度推定の比較

調査対象者番号	日本語学習歴(年)	日本滞在期間(年月)	日本語レベル(学年)	リーダビリティ推定		リーディングチュウ太単語レベル(点) <sup>(3)</sup>	
				(説明文)	(意見文)	(説明文)	(意見文)
LA1	4	なし	中級	6.33	5.0	1	1
LA2	6	11ヶ月	N2	8.06	4.44	2	1
LA3	4	6週間	中級	7.09	4.27	2	1
LA4	3	1ヶ月半	3級	5.48	4.15	2	1
LA5	3	なし	4級	3.8	3.06	2	2
LA6	3	なし	中級	7.9	3.86	2	2
LA7	4	11ヶ月	3級	9.18	6.72	2	2
LA8	5	1年	2級	6.86	4.26	2	2
LA9	5	なし	N3	7.85	1.83	2	2
LA10	2	なし	中級	6.02	5.9	2	2
LA11	2	なし	中級	2.67	0.65	2	2
LA12	5	5年	中上級	8.63	5.38	3	4
LA13	4	1年	2級	9.32	7.88	4	3
LA14	5	1年	N2	7.73	5.29	3	2
LA15	4	なし	3級	4.05	4.04	1	1
LA16	3	6年	中上級	7.39	5.86	3	4
LA17	1	3年	2級	6.86	-2.48	2	2
LA18	3	なし	中級	4.91	4.39	3	3
平均	3.67	1.2	中上級	6.67	4.14	2.22	2.06

〈表2〉日本語母語話者における作文の読みやすさと単語の難易度推定の比較

調査対象 者番号	リーダビリティ 測定		リーディングチュウ太 単語レベル(点)	
	(説明文)	(意見文)	(説明文)	(意見文)
JP1	7.31	6.67	4	4
JP2	6.29	5.99	3	3
JP3	7.67	5.69	3	3
JP4	7.68	7.49	3	3
JP5	7.77	5.22	2	3
JP6	6.43	4.17	4	2
JP7	6.21	4.78	3	4
JP8	8.35	7.19	3	4
JP9	7.88	5.5	3	3
JP10	7.08	6.36	2	3
JP11	7.34	5.42	2	2
JP12	6.39	5.28	3	4
JP13	6.24	3.57	2	3
JP14	6.91	7.61	4	5
平均	7.11	5.78	2.92	3.29

## 〈表現形式〉

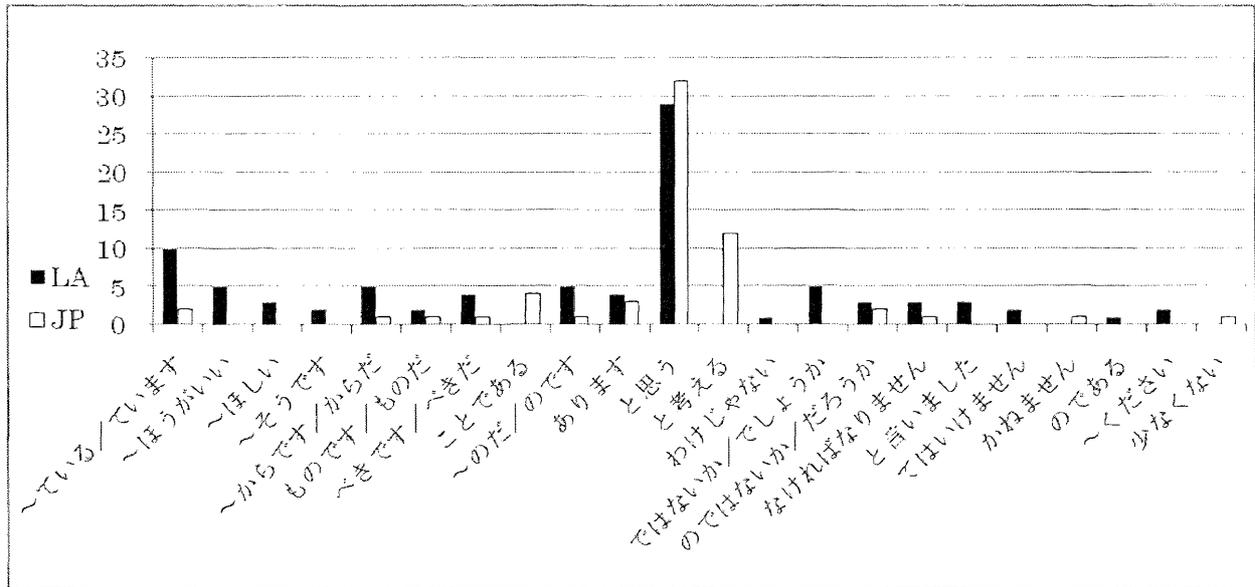
類似点： 非常に作文に使用された文体形式は敬体の「マス形」「デス」が多い。とりわけ「説明文」によく現われたのが「あります」という表現である。そして「意見文」には「と思う」というモダリティー表現の使用頻度が高い。また「説明文」「意見文」に見られた接続法は「添加・並列」が非常に多かった。

相違点： 母語話者の「説明文」には「受身」で終わる傾向が少なくない。また、母語話者の「意見文」にはラオス人学習者の作文に見られなかった「と考える」という文末表現もあった。そして、接続法である「添加・並列」の中で、ラオス人学習者が「て/で」を非常に使用した一方、母語話者が「連用中止法」という接続形式が多かった。

小野(2009)では、NS(日本語母語話者)とJFL(外国人日本語学習者)の意見文に現れた文末表現について調査した結果、NSでは「と思います」「と考えられます」が用いられているのみで、JFLの場合は非常に様々なバリエーションが用いと述べている。また、もう1つの異なる点はNSのほうが1文が長い傾向であると指摘した。そこで、本論でも同様な形式でNSとラオス人日本語母語話者の作文に見られた文末表現の比較を行った。ただし、「意見文」の他に「説明文」も見ることにした。その結果「説明文」に見られた両者の文末表現はほとんど同様のバリエーションであった。ただし、異なるのは「意見文」である。自分の意見を述べる時にNSのほうがよく「と思う」「と考える」という文末表現をラオス人日本語学習者より多かった。一方、ラオス人日本語学習者は教科書に記述されたバリエ

ーションの多い文末表現を使用している傾向が多かった。この点では先行研究と一致していることがわかった。しかし、本研究の結果でもう1点判明したのが、1文が非常に長いという現象はラオス人日本語学習者にも見られたことである。特に、日本語学習歴でなく、日本での滞在経験の長い人のみ見られた現象である。

<グラフ1> ラオス人日本語学習者および母語話者における意見文の文末表現



#### 4.2. 課題 2：ラオス人日本語学習者の「のだ」文の特徴について

ラオス人学習者における「のだ」文は、ある事情やある事柄についての事情説明の「のだ」を正確に捉え運用できていることがわかった。ただし、全体的に見るとラオス人学習者があまり「のだ」文を用いないという現象があった。そこで、「脱落」という現象が多かった。また、フォーカスの「のだ」は日本語母語話者の作文には非常に多かったが、ラオス人学習者には少ないことが明らかになった。

#### 4.3. 課題 3：「のだ」の誤りは日本語学習者の一般の問題である

国立国語研究所の作文コーパスにおける外国人日本語学習者の「のだ」文は計 120 例のうち、最も多い誤答は「脱落」計 79 例であった。したがって、「のだ」の「脱落」はラオス人学習者のみではなく、外国人日本語学習者の一般の問題であることが明らかになった。

山崎(2006)は国立国語研究所のコーパス以外、補助調査として日本で留学している上級の 2 名の作文データも収集した。その結果は、「のではないか」が 2 例あったのみであった。データが少ないので確実なことは言えないが、中国人学習者における「のだ」文の非用は学習歴の長短に関わらないことを示唆していると指摘している。しかし、本研究で行ったラオス人における「のだ」文について、日本語学習歴の長い学習者がより正確に「のだ」文を使用できることがわかる。ただし、この研究で明らかになったのは、日本での滞在経験の有無によりフォーカスの「のだ」文いわゆる「のではないか」等が日本での滞在経験のない学習者より順調に使用できるということが言えるだろう。こうした理由で、ラ

オス人日本語学習者における「のだ」文の使用特徴や誤りの特徴は日本語学習歴と日本での滞在経験により異なることが明らかになった。

<表 3> 外国人日本語学習者における「のだ」文の誤用例一覧表(単位は実数)

学習者出身	脱落	付加	混同	その他	合計
中国(CN)	14	3	—	1	18
カンボジア(CD)	1	—	—	—	1
韓国(KR)	29	4	7	6	46
マレーシア(MS)	21	4	2	4	31
シンガポール(SP)	1	—	1	—	2
タイ(TH)	12	4	3	2	21
ベトナム(VN)	1	—	—	—	1
合計	79	15	13	13	120

## 5. 結論

本研究では、大きく3つの部分にわけ、分析を行った。それは「説明文」および「意見文」のリーダビリティ測定、リーディングチュウ太を用い、単語レベルの分析を行った。次に「説明文」および「意見文」に現れた文末表現、接続について考察を行った。そこで、ラオス人日本語学習者の「説明文」と「意見文」におけるリーダビリティ、単語レベル、表現形式の特徴を探るために、日本人の作文との比較を行った。また、日本語の作文には非常に重要な役割と見なされる表現形式の「のだ」文についてもラオス人による作文でどの程度現れたのかを観察した。そして、ラオス人の作文に見られた「のだ」文の使用特徴を明らかにする上で、その特徴が外国人日本語学習の共通の課題であるのかを明らかにするため、ラオス人日本語学習者、外国人日本語学習者、日本語母語話者が用いた「のだ」文あるいは用いられない「のだ文」を比較し、ラオス人日本語学習者の「のだ」文の特徴を明らかにした。

その結果、ラオス人日本語学習者にとって「意見文」より「説明文」のほうが書きやすいことがわかった。また、リーダビリティの高い学習者と低い学習者の間にはかなり差がある。そして、日本での滞在経験があるかどうかは特に関係ないと見られた。ただし、日本語学習歴の長い学習者はリーダビリティが高い傾向があった。一方で、リーディングチュウ太で単語レベルを測った結果、やはり日本での滞在経験のある学習者に使用された単語レベルが日本での滞在経験のない学習者より難しくなることがわかった。さらにラオス人日本語学習者の「説明文」および「意見文」に見られた文末表現には話し言葉の使用が多かった。それはラオス人日本語学習者がまだ書き言葉に慣れていないのか、あるいは

は授業でそれほど重視されていないのではないかと思われる。そして「意見文」を作成する時、全般的に様々な文末表現のバリエーションが多かったが、それは日本での滞在経験がある学習者に強く見られた傾向であった。また、ラオス人日本語学習者における「接続法」については、多くの学習者がいくつかの接続法を使用しているが、それは話し言葉である。書き言葉的な接続詞等のような表現がまだ少なかった。最後の表現形式である「のだ」文については、多くのラオス人日本語学習者が「説明のノダ」文を多少理解し、用いられるのではないかと例からも指摘できる。ただし、理解・解釈、理由・状態説明、スコープの「のだ」のような用法がまだ理解できなく、「脱落」という誤用が非常に特徴なところであった。それは、ラオス人日本語学習者に限った問題ではなく、外国人日本語学習者の作文にも見られている。特に、文の中に「否定」、「疑問」をフォーカスしたい場合、日本語母語話者がよくフォーカスの「のだ」文を用いるが、ラオス人日本語学習者および外国人日本語学習者の作文には非常に少ないことがわかった。

以上が本研究で行った分析の結果であった。ラオス人日本語学習者の作文「説明文」および「意見文」に見られたこれらの問題点については日本語教育現場で工夫することで解決につながると思われるため、次にいくつかの点を述べたいと思う。

## 6. 作文教育への提言と今後の課題

本論では、機械の計算ツールで作文の読みやすさを測ったのみでなく、日本語教師経験のある日本語母語話者の判定にも行った。その結果からも、学習者の単語レベル、表現形式を向上させる上で、日本語の作文シラバスの再考が必要だとであるという結論に至った。

また、今回の結果で学習歴や日本滞在経験も関わってくることがわかり、自然習得の側面からを見ることや、学習者にとってあまり使用できないフォーカスという視点から、文末表現「のだ」のバリエーション「のではないか」や、取り立て助詞の「には」「では」等については今後の課題としたい。

注

(1)リーダビリティのサイト：<http://readability.nagaokaut.ac.jp/readability>

(2)川村（2012）、リーディングチュウ太のサイト：<http://language.tiu.ac.jp/>

(3)「とてもやさしい」を1点、「やさしい」を2点、「ふつう」を3点、「すこし難しい」を4点、「難しい」を5点に置き換えて、計算した。

## 参考文献

李在鎬・長谷部陽一郎・柴崎秀子（2009）「読解教育支援のためのリーダビリティ測定ツールについて」言語処理学会 2009 年次大会(鳥取大学)

市川保子（1997）『日本語誤用例文小辞典』凡人社, pp.38-41, pp.87-91

小野正樹（2009）「上級学習者の課題とする文法項目一意見の伝え方を例として一」『日本語教育の過去・現在・未来』第5巻文法 1, 凡人社, pp.81-97

川村よし子（2012）「日本語読解学習システムーリーディング・チュウ太の取り組み」『ヴェブマガジン「留学交流」』10月号 Vol.19, JASSO

小金丸春美 (1990)「ムードの「のだ」とスコープの「のだ」『日本語学』9-3, pp.72-82

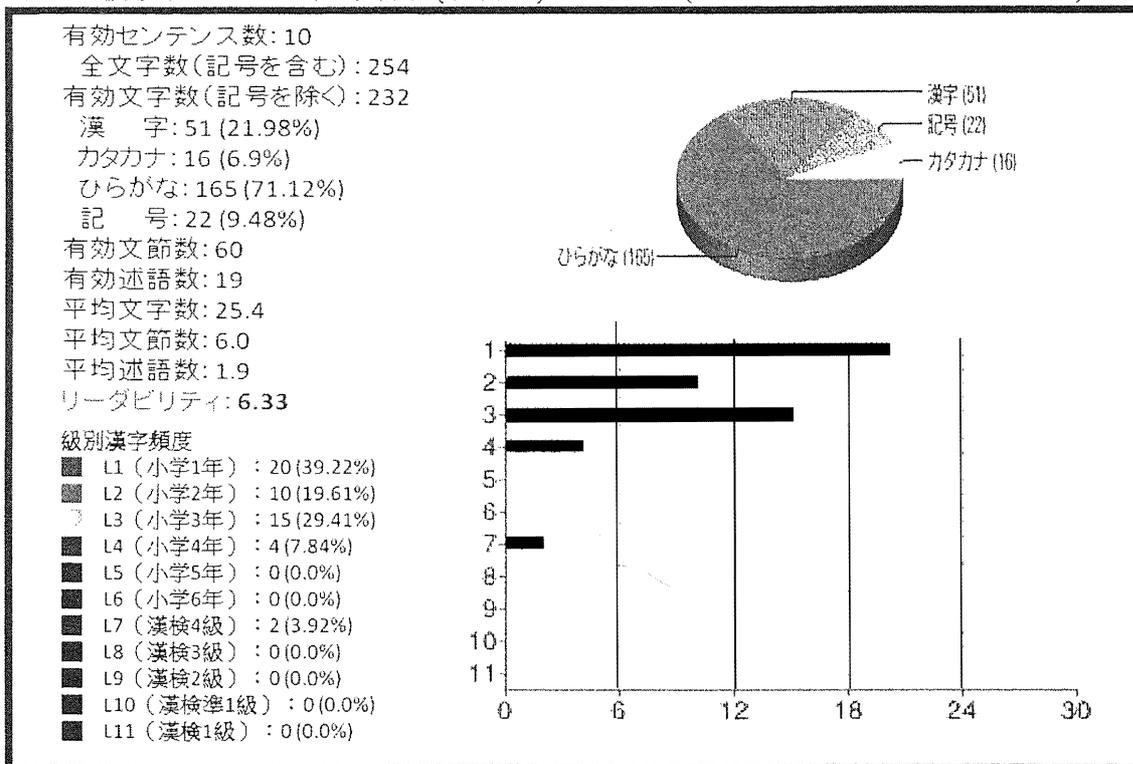
甲田直美 (2001)『談話・テキストの展開のメカニズム：接続表現と談話標識の認知的考察』風間書房, pp.222-232

柴崎秀子・沢井康孝 (2007)「国語教科書コーパスを応用した日本語リーダビリティ構築のための基礎研究」『信学技報』Vol.107

山崎恵 (2006)「中国語母語話者の作文に見られる誤用」『2006年台湾応用日本語学会シンポジウム』姫路獨協大学, pp.17-28

参考資料

<図1> 被験者：ラオス人学習者(説明文)：お正月 (<図1>：リーダビリティ)



単語レベル: ★ とてもやさしい

①単語レベル

総数	語彙総数	級外	1級	2級	3級	4級	その他
149	130	12	1	6	5	106	19
114.6%	100.0%	9.2%	0.8%	4.6%	3.8%	81.5%	14.6%
(74)	(68)	(4)	(1)	(6)	(4)	(53)	(6)
108.8%	100.0%	5.9%	1.5%	8.8%	5.9%	77.9%	8.8%

②漢字レベル

総文字数	漢字総数	級外	1級	2級	3級	4級	ひらがな	カタカナ	数字	英字	記号	その他
254	51	0	0	7	26	18	165	16	5	0	17	0
498.0%	100.0%	0.0%	0.0%	13.7%	51.0%	35.3%	323.5%	31.4%	9.8%	0.0%	33.3%	0.0%
100.0%	20.1%	0.0%	0.0%	2.8%	10.2%	7.1%	65.0%	6.3%	2.0%	0.0%	6.7%	0.0%
(85)	(32)	(0)	(0)	(7)	(14)	(11)	(41)	(4)	(4)	(0)	(4)	(0)
265.6%	100.0%	0.0%	0.0%	21.9%	43.8%	34.4%	128.1%	12.5%	12.5%	0.0%	12.5%	0.0%
100.0%	37.6%	0.0%	0.0%	8.2%	30.6%	21.2%	194.1%	18.8%	5.9%	0.0%	20.0%	0.0%

(Mathina PHOUMARINO、ラオス国立大学ラオス日本人開発センター講師、mathina2@hotmail.com)